*Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci.*, **54**, 91–99(2006)
武庫川女子大紀要(人文・社会科学)

# 幼児の身体表現の指導に関する保育者の意識について
## －身体表現の指導に関する困難さについてのアンケートの検討を通して－

遠　藤　　晶
(武庫川女子大学文学部教育学科)

# Teacher's Awareness on Teaching Body Expression Activities to Preschool Children
## －Through Questionnaire Analysis about the Difficulty on the Teaching Process－

Aki Endo

*Department of Education, School of Letters*
*Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

**Abstract**

The purpose of this paper is to analyze questionnaires about body expression education of kindergarten teachers. It is revealed that the teachers find difficulty in theaching process.

As a result, 114 items were submitted. The problems on a method of support, on teachers themselves, on the ways of preparing environment, and on the changes of children were pointed out.

## Ⅰ　問題の背景

従来の子どもの成長に関する懸念が多く聞かれる昨今，幼児教育の機能についての抜本的に強化する方向が示されている．

平成17年1月に，中央教育審議会幼児教育部会の答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼稚園教育の在り方について－子どもの最善の利益のために幼児教育を考える－」においては，幼児教育の原点に立ち返り，幼児の健やかな成長を保障する対応策を講じることが課題であると指摘された．

幼稚園等施設の教員に対しては，幼児の家庭や地域社会における生活の連続性，発達や学びの連続性を保ちつつ教育を展開する力などの専門性がこれまで以上に求められるようになっている．幼児教育に携わる教育者の専門性については，幼児を理解して，活動の場面に応じた指導が適切に行えること，家庭との連携を取りながら教育を展開していく力が求められている．さらに，遊びの中での興味関心に沿った活動にとどまらず，興味関心を生かした学び，幼稚園での子どもの日々の生活の延長上にある，小学校の生活や教科の学びに結びつけていく基礎を培うことも考慮することが求められる．

こうした状況の中，指導する保育者の資質の向上は重要な課題である．特に，幼稚園や保育所の保育者を志望する学生の，保育実践の基盤となる専門知識の獲得についても考慮していかなければならない．

本研究においては，これまでの身体表現教育の流れを概観し，実践上の保育者の具体的な問題意識を明らかにする．それらの問題意識から身体の動きの表現教育に求められることを考察し，将来の保育者を目指す学生の資質向上のための指導の視点を提示したい．

## Ⅱ　幼児の保育と身体表現の指導

### 1. 幼児教育における身体表現教育の変遷

これまでの，幼児の身体表現に関する実践の流れについて述べる．古市・遠藤・寺尾(2001)[1]によると，明治の幼稚園創設期より，律動遊戯の実践など身体で表現することが，幼児教育の内容として位置づけられてきた．大正期には，芸術教育運動との関連から「子どもらしい芸術性の高い歌」が求められ，童謡・童話が創作され，この時期の幼児教育には唱歌に伴う遊戯が重要視された．特に土川五郎が「律動」を重視し，歌から生まれる音楽と表現の調和を求めた．

第二次世界大戦が終わり，昭和23年に発行された「保育要領－幼児保育の手引き」には保育内容として「見学」「リズム」「休息」「自由あそび」「音楽」「お話」「絵画」「製作」「自然観察」「ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居」「健康保育」「年中行事」の12の内容があげられている．

昭和39年の幼稚園教育要領では，「音楽リズム」の領域のなかに，身体表現に関する詳細について次のように示された．

1. のびのびと歌ったり，楽器をひいたりして表現の喜びを味わう．
2. のびのびと動きのリズムを楽しみ，表現の喜びを味わう．
3. 音楽に親しみ，聞くことに興味をもつ．
4　感じたこと，考えたことなどを音や動きに表現しようとする．

上記の指導にあたっては，「イ　2に関する事項の指導にあたっては，幼児の年齢や発達の程度に応じたさまざまな表現活動をさせるようにし，からだをのびのびとリズミカルに動かすことを楽しませるようにすること．また，集団的な遊びのなかでリズミカルなものを適当に加えるようにすること．」「エ　4に関する事項の指導にあたっては，幼児の年齢や発達の程度を考慮して，幼児の気持ちや考えを自由に表現させ，創造的な活動を楽しませて，創造的な表現への意欲を高めるようにすること．」と示されていた．

平成元年に改訂された身体表現に関連する内容は，「表現」の領域に集約された形となり，その後平成10年に改正された幼稚園教育要領でも，その基本的な見方は変わっていない．表現の領域については「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して，豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにするとして，次のような「ねらい」が示された．

(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ．
(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ．
(3) 生活の中でイメージを豊かにし，様々な表現を楽しむ．

各ねらいは幼稚園修了までに育つことが期待される心情，意欲，態度などが示された．配慮事項に関しては，自然などの環境のなかで得た感動体験が表現の重要な契機になること，素朴な子どもの表現を大切にすることを確認したうえで，子どもの生活経験や発達に応じた表現の楽しみ方を工夫するという確認がされた．保育の中では，身体表現の活動として，遊びを基本としながら「表現遊び」「リズムダンス」「歌遊び」「手遊び」などが行われている．

さらに，幼児教育の場には，家庭での子どもの育ちを支援する役割が加わってきた．保育者には，毎日生活を共にする集団だけでなく，一時的に出会う子どもの集団に対しても対応できることが求められる．一時保育や子育て支援の場でも，身体を動かして人と関わる遊びは，親子のコミュニケーション，子ども同士の遊びの広がりなどが期待できるとして，「親子体操」「ふれあい遊び」「親子エアロビクス」などが取り入れられている(金谷・坪井・吉田　2005)[2]．

身体の動きを伴う遊びを子どもにとって無理のない遊びとして楽しく展開するためには，保育者の力量に負うところが大きい．

### 2. 身体表現の指導および教材開発に関する研究

平野・牧野(2002)[3]，平野・牧野(2003)[4]は，身体表現の活動が友達の存在を豊かに感じることや，他者の動きを取り込み共感する能力の育ちに貢献するものであること，また，身体表現の活動によって子どもの豊かな感性の育ちの成果が見られたこと，保育者にとっても自覚的に子どもへの関わりが行われるよう

になったことを報告している．青山(2003)[5]がいうように，身体表現の活動を通して，子どもは物事に対する気付きを深め，さらに人やものにかかわる力が育つと考えられる．しかし，保育の現場では「表現あそびは難しい」と捉えられているのである．

遠藤・花木(2005)[6]は，身体表現の教材の原型となる表現作品の作成を試みた．その教材を実際の保育の場で保育者がどのように活用したかを検討した結果，保育者は，教材作品をそのままの形を用いるのではなく，教材を元にして，子どもの発達や興味の状況に応じて再編をしていることを報告している．

教育の現場で様々な方法で身体表現に関する指導は行われてきた．幼稚園教育要領の変遷のなかで，現在は具体的指導の内容や方法については明記されなくなったが，保育者の工夫と努力で実践されている．しかし，保育の実際には，保育者の多くが問題を抱えながら実践している．そこで，身体表現の指導の際にどのような点に保育者は困惑や問題意識を持つのか検討する．

## Ⅲ　身体表現の指導に関する保育者の意識についてのアンケート

### 1. 実施の方法と内容

#### (1) 対　象

幼稚園・保育所等の施設で保育に携わっている現職の保育者48名を対象に調査を行った．筆者が担当した「上級免許取得のために開講された幼児の身体表現」の講義の受講者である．それぞれの勤務年数ごとの人数については6～10年2名，11～15年11名，16～20年8名，21～25年21名，26～30年4名，31～35年1名，35～40年1名であった．

#### (2) 手続き

調査は2005年8月下旬に実施した．対象者に「身体表現の指導で困っていること」と「教材の研究について」を自由記述形式で回答を求めた．記述の内容をカテゴリごとに分類し，その内容を検討した．

### 2. 結果と考察

#### (1) 身体表現の指導の困難感の要因

アンケートの記述の内容から114件の記述を得た．それぞれをA「指導の難しさ」，B「保育者自身の苦手意識・力量不足感」，C「環境構成」，D「子どもの基本的な姿」，E「その他」のカテゴリに分類しそれぞれの件数ごとの割合をFig.1に示した．それぞれのカテゴリをさらに下位項目ごとに分類して件数をまとめた．実践上の専門性とは何かを探る上では，保育者自身に自らの価値のありようを自覚的に捉えなおす営み(本田　2005)[7]が求められる．分析に関しては，内容をカテゴリに分類し指導上のさまざまな状況から発生する保育者の思いを事例的に扱うことに配慮した．各々の記述内容について次に検討する．

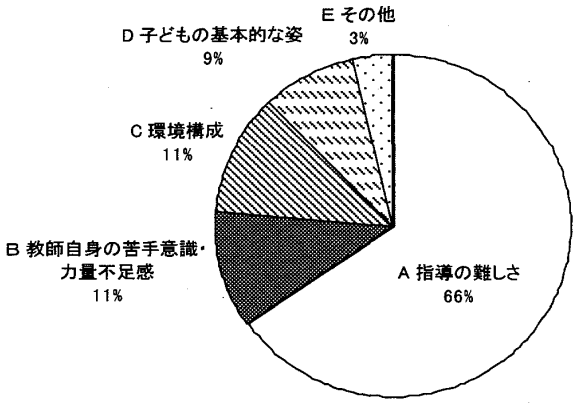


**Fig. 1.** 身体表現の指導に関する問題の要因とその割合

① 指導の難しさ

カテゴリ A「指導の難しさ」については 75 件（全体の 66%）を占めていた．Table1 に下位項目ごとに具体例をまとめた．記述の内容を見ると，身体表現活動の特性から来る問題点が浮かび上がる．

下位項目に含まれる内容として最も多かったのが下位項目 a.「言葉かけが難しい」には，「言葉によるきっかけをどう作るか」「言葉をかけるタイミング」「一人一人への適切に言葉をかけること」「思いにそった言葉をかけること」など，言葉かけに関する記述が 21 件（全体の 18.4%）得られた．保育者の言葉かけが子どもの気づきにヒントを与えることもあるが，異なるイメージをもつ子どもが保育者の言葉をどう生かしているのかは，クラス全体の活動のなかで保育者が十分に読み取れないこともある．「イメージにあう言葉かけ」「子どものイメージを広げたり，ヒントになる言葉かけが難しい」などイメージを広げる言葉をどのように選択するかについても問題があげられている．言葉かけは，動きのきっかけにもなり，保育の展開の重要な要素である．それぞれの子どもがイメージするものが目に見えないものだけに，保育者の言葉の用い方は指導上の最も困難な要素と考えられる．

**Table 1.** 指導の難しさについての内容

| 下位項目 | 具体例 |
|---|---|
| a. 言葉かけが難しい（21 件） | 一人一人への適切な言葉かけ<br>表現することをしり込みする幼児の言葉かけやきっかけ作りが難しい<br>見たり感じたりしての直接体験による表現はスムーズにできるが，想像のなかで表現する際，教師の言葉かけやイメージの膨らませ方が<br>幼児一人一人の思いにそった言葉かけが難しい<br>友だちと違う表現になるための言葉かけが難しい<br>子どもの動きを引き出したいが，イメージを広げたり，ヒントになる言葉かけが難しい |
| b. 抵抗感のある子どもへの指導が難しい（15 件） | すぐに飽きてしまう子どもへの導き方<br>興味関心の少ない子どもにいかに楽しく活動できるか模索している<br>乗ってこない子どもに対する配慮<br>身体を動かすことに抵抗のある子どもの気持ちをどう高めていくか<br>年少児で体を使って表現することが苦手な子どもが多く見られる<br>手をつなぐことだけでも，うまくいかないことがある<br>緊張して，不安が高く，誘っても参加できにくい幼児がいる<br>どうしても表現活動に参加しようとしない子どもがいるとき<br>自分を出せない子どもがいる<br>活動に入ってこない場合の対応<br>全く動けない子ども，見るだけの参加型の子どもに，「見ててね．やりたくなったらいつでも入ってきてね」としか声をかけることができない |
| c. 引き出す指導の難しさ（11 件） | 幼児の内面をどう表出させるか<br>させる表現ではなく，自分で考え表現できるためにどう投げかけるか |
| d. 一人一人の子どもの理解が難しい（11 件） | 一人一人が自由に楽しんで表現できているか<br>一人一人の思いを理解したいと感じ取ろうとするが十分理解できない<br>一人一人の思いが出やすいように援助すること |
| e. クラス活動への連動（10 件） | 個々の思いを受け止め，認め，支えながらクラスの遊びにしていくこと<br>個人差が大きいので全体での指導が難しい<br>手遊びやリズム遊びなどを積み上げて，ある程度学級経営ができてからでないと表現活動には入りにくい |
| f. 保育の計画とねらい（2 件） | 教師のねらいと幼児の興味関心がずれていること<br>教師が計画したことをすべてしてしまおうとすると，より楽しくなくなる |
| g. その他（5 件） | 年長児では行事のための表現活動になりがち<br>実体験をして内面に蓄えていないと表現する喜びを味わえないので，経験をどのように積むか悩む<br>自ら表現活動をしていける幼児をそだてること<br>年齢に応じた無理のない表現ができているか |

下位項目 b.「抵抗感のある子どもへの指導が難しい」で計 15 件(全体の 13.1%)であった．抵抗感の具体例として，「すぐに飽きてしまう」「興味関心が少ない」「乗ってこない」など意欲が持てないこと，「身体を動かすことに抵抗がある」「体を使って表現することが苦手」「手をつなぐことだけでも，うまくいかないことがある」という身体の動きを楽しむことや触れ合うことに抵抗感があること，「緊張して，不安が高く，誘っても参加できにくい」「表現活動に参加しようとしない」「自分を出せない子ども」「活動に入ってこない」など身体を動かす活動への参加に抵抗感を示すものであった．また「全く動けない子どもや見るだけの参加型の子どもに対して，参加を促し，参加の時期を待とうとしても，それでもなかなか意欲につながらない」など，身体表現の活動に対する興味や意欲を高める指導の難しさが語られている．

下位項目 c.「引き出す指導の難しさ」にまとめた，「幼児の内面をどう表出させるか」「させる表現ではなく，自分で考えて表現できるためにどう投げかけるか」という内容は，子どもの自発性を尊重しながらも，保育者自身の思いと照らし合わせようとするところの難しさであろう．子どもの思いや言葉を身体の動きに変換する作業を保育者が援助する際，保育者の思いが優先されてしまわないようにすること，子どもの思いや動きにそった言葉を用意することなど，即興的な判断力が求められる．

下位カテゴリ d.「一人一人の子どもの理解が難しい」については，クラスとして一斉保育の形態では身体表現の活動を進める際に個人へのアプローチが難しいこと，「一人一人が自由に楽しんで表現できているか」「一人一人の思いを理解したいと感じ取ろうとするが十分理解できない」「一人一人の思いが出やすいように援助すること」など，「個」と「集団」の育ちを同時に捉えることの難しさが述べられている．集団でかかわりつつ，子ども一人一人の心の中の思いにふれる作業を，保育者が処理していかなければならない．身体を通して，友達や保育者と関わる身体表現の活動の特性から来る困難さと理解できる．

② 保育者自身の苦手意識・力量不足感

次に，カテゴリ B の「保育者自身の苦手意識・力量不足感」については全体の 11%を占めていた．今回の調査対象者は保育者としてのキャリアを積んできているが，身体表現の指導に関して「子どもの表現をうまく引き出せない」「十分に楽しめない」など保育者自身が苦手意識を持ち，子どもの思い表現を引き出そうと思うと「気構えてしまう」「リラックスして自由に取り組めない」など，緊張感をもちつつ指導していることがうかがえる．

苦手意識の要因としてあげられるのが，「イメージをかりたてるピアノの伴奏が自由自在にできないこと」「ピアノでの音響効果がうまく出せない」などピアノの演奏技術の問題を挙げている．身体表現の指導における重要な楽器としてピアノがある．ピアノは旋律・リズム・音程などの演奏の効果が得やすく，保育室に備えられているので身近な楽器でもある．子どもの表現を支える環境として，子どもの表現に応じた伴奏や，子どもの動きにそったアレンジができることは，保育者自身の到達したい目標である．しかしなかなかそこまで到達することができないというのが現実のようである．

また「保育者自身の中にレパートリーが少なく保育が広がらない」というように，レパートリーが少ないことに不自由さを感じている．保育者の遊びの情報量が豊富であれば，保育の展開も豊かになる．「苦手意識を感じさせず身体表現ができるようにしたい」と研修等に参加して身体表現に役立つ音楽や新鮮な教材の情報を求めている．現実には，教材研究を行う時間がとれないことや新しいものを習得できないというのが，保育者の悩みのようである．基礎的技能の習得が保育の上での自信に繋がるのであれば，養成課程の学生の時期から習得しておきたい．

③ 環境構成について

カテゴリ C「環境構成」については，a.「教材・題材選び」 b.「音楽的環境」 c.「発表の場」を下位項目とした．

a.「教材・題材選び」に関しては，「子どもが自分の思いを表現するために見せる題材」や「子どもの生活や興味にそったものを」を取り上げようとするが限界がある，「参考になる教材がほしい」など手がかりになるものを求める記述があった．保育者が題材をどのように捉えるか，またどのようにそれを表現するか，人的環境としての保育者のあり方が問われるところである．保育者が身体表現の題材をどのように選んでいるかについては次の項で改めて検討する．

b.「音楽的環境」について，保育者は「イメージにあう曲を選ぶこと」を目標としながらも，なかなか「表

現に合わせるリズム・曲を選ぶことが難しい」としている．保育者が知り得る曲数が限られていることや，既成の曲をテープやCDで検索するが身近にある曲に限定される．どうしても既成の音楽を見つけることが出来ないときや，既成の曲で不十分な場合には，保育者がリズムや旋律などのアレンジをすることもあり，保育者の音楽的センスが求められるところである．

c.「発表の場」については，「どんな表現をも認めたいと思いながら，発表会では見る側の評価を意識してしまうので，子どもたちが全員満足しているか疑問に感じる」「発表会などで心から楽しんでいるか疑問」「幼児の一人一人の思いを大切にする日常の保育のなかでの表現のし方だけでは，何をしているかわからないなど，見ている側が見てわかるような表現の形にしようとする」など発表場面に対する葛藤が窺える．日常の保育では，思い思いの表現を自由に出し合えても，見せる場面では，見栄え良くする工夫も求められる．人の前で発表するという場面では，子どもの発表欲求を満たし，感情をコントロールすることも求められる．発表することを楽しめるように工夫することが保育者に求められるところであろう．

④　子どもの基本的な姿への戸惑い

身体表現の活動を通して保育者が感じる，d.「子どもの基本的な姿」については，「子どもの表現力の乏しさ」「活動以前の問題」「背筋を伸ばして立つこと，座ることなど，姿勢を保つことが出来ない」「ひとりで何かをすることに抵抗をもつ子どもが増えてきた」という指摘がされた．身体表現の活動においては「保育者の話を聞いたり，音楽をきいてイメージを広げる基本となる話を聞く態度」が不可欠となるが，こうした『聞く』ことができないことへの戸惑いを感じている．

また，「決められた課題はこなせるが，自由な表現を求めると途端に出来なくなる」や「友だちと同じ動き」というように，自由さに抵抗を感じている．「調子に乗りすぎ，度を越してトラブルになる」「ふざけてしまう」など，解放的な活動のエネルギーによって収拾がつかない状況に結びつくことも，保育者にとっては指導のしにくさと捉えている．

**(2) 教材研究の方法**

教材研究の方法については，Table2に示した．保育関係の雑誌や教材として販売されているものを手がかりとしたり，自分でCDやテープなどで曲を聴いたりして，保育者が自分で求めることが多い．保育者を対象にした実技講習会や研修会で曲を入手したり，教員同士で情報交換をしている．

表現活動のヒントにするものとしては，最も多かったのが「絵本やお話」「日常の生活や遊びの中で身体で表現する題材をみつける」「自然の環境」「図鑑」であった．ヒントにしたものを表現活動のための構成を考え，「自分でアレンジ」して，目の前の子どもに応じた展開の仕方を考えている．そして，より効果的に身体表現活動を展開するために，表現を助ける道具や場所を作っている．持ったり，身につける小さな道具だけでなく，見立てを助ける場所作りも手作りのようである．

**Table 2.** 教材研究の方法

| 研究の方法 | 具体的方法 | 件数 |
|---|---|---|
| 自分で求める | 雑誌・教材 | 10 |
| | 自分で曲を聴く | 10 |
| | 研修会講習会 | 8 |
| | 教員間の情報交換 | 7 |
| | 楽譜を探す | 5 |
| | 本屋・楽器店 | 5 |
| | CDを探す | 4 |
| | テレビの幼児番組 | 3 |
| | インターネットで探す | 3 |
| | その他 | 2 |
| ヒントにするもの | 絵本・お話 | 15 |
| | 日常の生活や遊びの中で身体で表現する題材をみつける | 15 |
| | 自然環境 | 11 |
| | 図鑑 | 3 |
| | 幼児に知らせたいと思うもの | 3 |
| | その他 | 1 |
| アレンジする | 自分でアレンジ | 5 |
| | その他 | 2 |
| 環境構成 | 表現を助ける道具をつくる | 7 |
| | 見立てる場所作り | 3 |
| 情報入手先 | 取引業者 | 3 |
| | 実習生から | 1 |
| その他 | 特別に用意しない | 1 |

## Ⅳ　身体表現の指導について

### 1. 身体表現の教育の問題と指導の課題

これまでの幼児教育における身体表現の教育の変遷を概観すると，平成元年の幼稚園教育要領の改訂の際，具体的な指導の内容の記述がなくなり，指導の方法に関しては保育者の指導に任された形となった．改訂の原点は，教師主導型の保育の反省から子ども中心の保育への転換を図ることであった．時間経過のなかで，子どもの育ちの変化をふまえた教育の強化策が提案されている．

この流れの中で保育に携わってきた現職の保育者を対象にアンケートを行い，これまでの身体表現の指導において困難な点をまとめた．その結果，

- 言葉かけや子どもの自由な表現を引き出すことの難しさがある．
- 身体表現の指導･援助の具体的な方法に難しいと感じる点が多い．
- その前提として，子どもの発達の状況から育ちの変化が見られ，身体表現の指導においては動きたくなる意欲を高める指導が難しい．

ことが示された．身体を通しての集団活動という特性から発生する問題と，自由な表現を引き出すという指導の方法と，さらにその指導に対する基礎的技能が求められるという点が，身体表現の指導に関する困難さに関連していることがわかった．

身体表現の指導においては，「自由な表現」に重きを置いた「教えない」保育でなかったか，あるいは保育者の苦手意識から教育の機会を遠ざけることはなかったか，子どもの発達の姿をみると，これまでの反省を求められているように思われる．

多くの保育者は難しさを感じながらも，保育に役立つ情報を集め，保育者の得意なところを生かしつつ苦手意識を克服しながら指導している姿が読み取れた．実際指導する上で，身体表現の指導の内容が十分に体系化されていないため，指導のよりどころが少ないことも指導の難しさに結びついているものと思われる．アンケートで示されたいくつかの問題意識から，身体表現の指導の課題を考察したい．

#### (1) 多様な表現の方法を学ぶ機会を与える

- 模倣

身体で表現することを模倣しながら表現の方法を学ぶことを大切にしたい．身体表現遊びは何気ない生活の中の体験を子どもに意識化しその遊びを繰り返すことで，見つけた動きを子どもの身体に定着していくもの(坪倉，1993)[8]という．動きのパターンを知っていればより豊かに動きであらわすことができる．友だちと同じ動きをする，保育者の動きをまねるということを繰り返しながら，動きのパターンを学ぶことも重要であろう．アンケートの記述にも「友だちと同じ動きをする時の対応に困る」という記述があった．無理に違う動きを考えることを課せられては，解放された活動にはなりにくい．奥(2005)[9]は造形の表現に関して，幼児の発達のプロセスで模倣による表現方法の取り込みが積極的な創造につながる行為と捉えている．幼児が身体を使って表現することを獲得していく過程においても，同様に模倣の過程を肯定的に捉えることも必要であろう．模倣によって自分の動きを確かめるという過程は幼児期の子どもにとっては大切なことではないだろうか．

- リズムにあわせる心地よい体験

今回のアンケートには自由な表現の指導に関する内容が多かったが，リズムを楽しむ活動についての記述はなかった．自由な表現を引き出す指導に比べて指導者が負担なく楽しんでいるからであろうか．既成の動きがついたものや簡単な動きなど，子どもにとっては目の前の保育者の動きを見ながら一緒に動きを楽しむ活動である．決まった動きを一緒に楽しむことは一体感･同調を味わう体験でもある．

- 動きと心の一致

広岡(2002)[10]は幼児の世界の「創作作品」は芸術的なものというよりは，自分の思いをそのまま表出することという．子どもの素朴な気付きや思いが身体の動きとして表せることを楽しみたい．

- 表現するためには聴くことを育てる

広島県教育委員会(2003)[11]が実施した平成15年の幼児教育調査報告で，幼児の日常生活のなかで調査

を行った結果，「身体的表現」は，数や言葉などの思考力を必要とする活動との関連があると報告している．身体表現活動では，動きや表情という出力された部分を育てることに目が行きがちであるが，子どもの表現力の基礎となる「聴く身体」「見る身体」との関連が考えられる．小学生の学習への連動からみても学ぶ基本的姿勢の獲得は幼児期の重要事項である．子どもの発達を支えるうえでも身体表現活動が果たす役割は大きい．

**(2) 関わりのなかで表現することを学ぶ機会を与える**

身体表現の遊びのなかで，保育者が言葉をかけることによって，子どもは気付かなかったことにも触れていくのであるから，保育者の存在や保育者の言葉の影響は大きい．「保育者」対「子どもの集団」という形態も，重要な指導の形態の一つとして考えたい．子どもの一人一人を理解しようとすると保育者は全体の活動が見えなくなることなど「個」と「集団」をどのように援助するかという問題を抱えるが，鯨岡(1998)[12]は，保育には「子ども一人一人の主体を尊重してその主体の個性的な己立性を育てる側面だけでなく，同時に集団活動の中で「共に生きること」を育てるという両方の意義が含まれるという．身体で表現する活動においても，「個」か「集団」かではなく，「個」も「集団」も育てるという視点から捉えたい．

保育者のかかわり方は，子どもの年齢によっても異なる．福原(2001)[13]は，3歳児の表現遊びは，保育者の目にとまるようなるような「動き＝ふり」をして，保育者に対して自分のことを気付いてもらいたい，一緒に遊んでもらいたいという気持ちが強く現れているものであると述べている．低年齢児の場合は，生活や遊びの中での出来事や，言葉がきっかけとなって身体的な表現となることが多いが年長になると，友達同士あるいは集団の中で，言葉による刺激や，友達の動きやイメージをヒントにしながら発想がより豊かになる．人との関わりの中での素朴なやり取りから，社会性や協調性の育ちを期待したい．

**2. 保育者の資質向上のために**

保育者を対象としたアンケートで身体表現の指導力について「自信がない」「引き出すことが難しい」など，自己反省的に保育者としての力量を評価していた．子どもの動きのイメージに結びつくような表現手段を保育者自身が持ち合わせることは，子どもの表現を豊かにするのに繋がる．曲を多く知っていること，ヒントになる資料を豊かに持つこと，展開したりアレンジできるアイデアを持つこと，興味を広げようとする保育者自身の興味関心をもつことなど，幅広い情報収集力と情報を活用する応用力が求められる．

指導のプロセスには，子どもの表現を，「受け止める－認める－展開する」という，複雑な情報処理が求められる．さらに，保育者には意欲を育てる言葉を用意できる判断力や言語表現力が求められる．

身体表現は素朴な表現を大切にしながら保育者とのやり取りを楽しむ活動である．何気ない生活のなかにおもしろいと発見できる保育者自身の感性が子どもの豊かな表現に必要であろう．

アンケートに対して「特に困難は感じない」「幼児と身体表現をするのは大好き」という，身体表現の指導に対して楽しんで活動を進めている回答も得られた．こうした保育者の自己肯定感が，保育をする上での重要な環境的要因となる．保育者が興味関心あるもの，得意なことには，子どもは惹きつけられる．

## V　まとめ

本研究では，指導の実際の中で感じる身体表現の指導の困難さについて自由記述から身体表現の指導の困難さの要因について検討した．その結果，自由な表現の指導を展開する内容に難しさを感じていることがわかった．保育者としての基礎的技能を獲得していることは自信をもちながらの指導に結びつくこと，また，子どもの状況が変化する中で生まれる新たな対応力が求められることが示唆された．

しかし，保育者の具体的な指導の実際については検討できていない．保育者としてのキャリアや活動の内容や方法など保育環境の違いもあり，困難さについては非常に主観的な表現も含まれているので，これまでの保育者としての発達のプロセスについても考慮しながら検討もする必要があると思われる．

最後に，日ごろ保育者を目指す若い学生を対象とした授業を展開している筆者にとって，保育の現場で長く勤務された保育者の率直な考えが聞けたことは非常に貴重であった．幼児教育の指導に関する資質向上のために，上級免許の取得が上げられているが，内容を伴う資質の向上をしていくためにも，保育者の

養成について考えていくことを今後の課題としたい.

## 文　献

1) 古市久子・遠藤晶・寺尾正，幼児の音楽教育における黎明期の実際とその表現的意味，大阪教育大学紀要 第Ⅳ部門，50，93-108(2001)
2) 金谷京子・坪井敏純・吉田ゆり，子育て支援の限界と今後の課題－保育所を中心とした子育て支援活動調査から－，保育学研究，43，1，63-75(2005)
3) 平野仁美・牧野敏枝，身体表現を通してかかわりを育てる実践研究－縦割りの生活を生かした運動会の取り組み，日本保育学会第55回大会発表論文集，654-655(2002)
4) 平野仁美・牧野敏枝，身体表現の保育が子どもと保育者の育ちにもたらすもの－4歳児の保育実践からの一考察，日本保育学会第56回大会発表論文集，388-389(2003)
5) 青山優子，毎日楽しみたい表現遊び，女子体育，2，24-27(2003)
6) 遠藤晶・花木沙織，幼児の表現遊びのための運動会作品－運動会における発表と日常の保育にいきる題材をめざして－，日本保育学会第59回大会研究論文集，262-263(2006)
7) 本田和子，現代における乳幼児の発達課題，保育学研究，43，1，19-26.（2006）
8) 坪倉紀代子，身体表現あそび－身体表現へのきっかけ－，女子体育，35，7，20-21(1993)
9) 奥美佐子，幼児の描画過程における模倣の効果，保育学研究，42，2，59-70(2005)
10) 広岡キミヱ，動きのリズムの始まり，女子体育，44，2，24-27(2002)
11) 広島県教育委員会，平成15年幼児教育調査報告，http://www.pref.hiroshima.jp/kyouiku/hotline/05junior/1st/h15 _ y _ chosa/kekka/index.htm(2003)
12) 鯨岡　峻，両義性の発達心理学，ミネルヴァ書房，202-203(1998)
13) 福原昌恵，幼児たちの『身体との出会い』，女子体育，43，5，22-25(2001)